

甌島は、現金収入を得る手段としての工業の存在が皆無といってよい。最近新しく発展しつつあるのが観光業である。観光客は、1、2年前からぼつぼつ来るようになった。この結果、連絡船の最初の寄港地である上甌島の里などには、民宿が数軒見られる。甌島の観光業はまだ未開発の段階といってよく、今後が注目される。

甌島の過疎は、上記のように各産業がふるわなくなって来ており、所得が相対的に見て低いことが主な原因である。と同時に島には都会風の諸施設がそろってないことも原因している。島には都会的な娯楽施設が全然ない。また高校もない。これは全国的に進学率の高くなった現代においては大きな負担である。

## 愛知県北設楽郡豊根村の地誌的研究

### — 林業を中心として —

田 辺 保 世

論文は、愛知県東北部の1山村を対象とすることにより、現段階の山村の個別現実的姿を明らかにしようとしたものである。

近年における政治、経済、社会条件の大きな変化は、山村にも波及した。それらの一端は、たとえば過疎問題として社会問題化されているが、ことは単に、それにとどまらない。様々な問題を山村は抱えている。論文は、こうした山村の変化に軸をおいて考察することにより、その地域性を鮮明化しようとした。そこでは、当然、経済基盤の分析が主要な課題とならざるを得なかった。更に、林業は、調査地域における主要な生業であることから、これの分析を主におこなった。こうした分析を通じ、より一層、より深く、地域性を明らかにしようとした。

さて、対象地域は、自然環境に大きく規定され、地域の生産活動に、多大な制約を与えている。それは、農林業以外の生産活動に適さないことまた、農業における低生産性として現出している。こうした現状をみると、林業のみが、唯一、地域発展に向けての可能性を秘めていると思われる。しかしながら現実には、林業の生産は、むしろ後退している。単に、生産量だけではなく、造林活動においてもである。

調査地域は、全般的には、林業生産に有利な状況にある。自然的な面はもちろんのこと、社会的

条件も大方有利である。では、林業の停滞は、一体、何に起因するのであろうか。

この問題を、歴史的、あるいはまた、林業の生産構造の面から探ってみると、それらは、直接的には、蓄積量の減少の結果として捉えられる。更には、林業生産の構造上の問題、としても捉えることができる。しかし、この問題を、調査地域の林業のみに限定せず、全体的に — 昭和30年代に始まる急速な人口流出や、他産業との関係で — 捉え返してみると、これは、地域のための個別的問題ではないと思われる。

調査地域は、愛知県の後進地域といわれる北設楽郡の中においても、自然環境的に、一層の悪条件におかれており、これが歴史的条件の媒介を通じ、先の問題とからみ合い、一層肥大化して現象しているのだ、ということができるとと思われる。

このような捉え返しの下に、対象地域を改めてみるならば、そこで営まれている、人々の生活、それは一見近代化され、進歩、発展したかにみえるが、根底には依然多くの問題が未解決のまま存在しているようである。

## 山形県上山盆地の地域性

### — 農業を中心として —

#### 三 浦 千代子

調査地域である山形県上山盆地は、山形盆地と米沢盆地の間にあり、東北日本の内陸盆地列の中で最小規模のものである。蔵王火山の泥流によって山形盆地と分断されているが、上市市と山形市との間は約10kmで交通の便もよい。卒論では主に農業の面から地域性を探ってみた。

調査地域においては、自然条件が農業に及ぼす影響が特に大きいといえる。降水量が少ないこと（年間1162mm 1961～70までの平均）、盆地を流れる蔵王川、宮川が酸性毒水河川であり、この河川水を灌漑に用いているということは、稲の生産量を低下させ、生産費、労働の面でも多くの負担がかかる。藩政時代から農民は水不足ととりくんできた。

盆地北部久保手地区と南西部西郷地区には溜池が多く存在する。宮城県を流れている横川から分水する横川堰は、藩政時代に農民側から計画されたもので明治時代になって完成した。真水供給という意味で現在でもその役割は甚大である。